

02-003

広さを考慮した保育環境の構造化と個別配慮の実践—京都市営保育所での取り組み—

落合 利佳

京都女子大学 発達教育学部 教育学科

【目的】 広さの違う保育所の室内環境での構造化および個別の配慮に関して検討を行う。

【方法】 京都市営 A 保育所（延床面積 1900m²、園児数約 190 名うち 3・4・5 歳児 110 名）、B 保育所（延床面積 600m²、園児数約 160 名うち 3・4・5 歳児 100 名）を訪問し屋内環境の観察と関係者から聞き取りを行った。調査時期：平成 31 年 1 月～2 月。調査内容：(1) 身辺自立・生活、(2) 室内自由遊び、(3) 刺激の低減、(4) 個別の配慮

【結果】

A・B 保育所共通

着替える場所から、棚や壁などで室内を視界を遮り、普段使わない棚はカーテンで隠していた。室内に遊びのコーナーを複数設定し、棚、マット、色テープなどで空間を区切っていた。写真や文字、イラストなどを、玩具の収納棚、全体スケジュールに用いていた。また、時間の予告には、イラスト、数字の他、時計の文字盤に色テープを貼る、タイムタイマーで予告していた。

A 保育所（広い）

(1) 食事時間を時計とイラストを使って提示していた。(2) コーナー毎に複数の子どもが余裕をもって遊べる広さを取り、棚やマットなどで空間を仕切り、さらに十分な間隔とっていた。また、机と椅子、着替えやロッカーの場所は、それ以外の遊びのコーナーから十分に距離を離していた。(4) 部屋の遊びのコーナーの横や廊下に置いた机で確保していた。特定の児童に対しては、名前の書いた紙やトレイや小箱で制作物の置き場所を作っていた他、発達に課題のある子どもに対応した十分な広さのある玩具コーナーを用意していた。

B 保育所（狭い）

(1) 洗面台周辺にコップと歯ブラシの置き場所を固定していた。靴下なども一か所にまとめて収納するなど、子どもの動線をシンプルに、室内の活動内容によっては布で玩具などの棚を随時覆い隠し集中しやすくしていた。文字やイラスト、写真を昼食時の準備から片付け時に使用。(2) 洗面やピアノなどに隣接して遊びのコーナーが設定されている。3 人以上の児童が集まると空間からからはみ出す。動線と遊びのコーナーが重複する。玩具のラベル等にはカテゴリー毎に統一した鮮明な色をラベルや収納箱に用い、箱もスペースに余裕のある物を使用。(3) ピアノは使用しない時は蓋をテープで留める。(4) 部屋の押入れの下段を使用。特定の児どもには所長室で対応。

【結論】 今回調査を行った京都市営保育所では、それぞれ広さに応じて環境や保育の工夫がされていた。

本研究は JSPS 科研費 JP19K02632 の助成を受けたものです。

02-004

保育者における与薬に関する薬の理解と行動に関する研究

佐野 葉子

東京福祉大学 保育児童学部 保育児童学科

【緒言】 現在の保育所においては、保護者が多様な働き方を行っていることや、障害や病気の子どもの保育することがあるため、保育者が子どもに与薬を行うことも少なくない。厚生労働省の調査によれば、病児保育の延べ利用児童数が平成 21 年では約 30 万人であったが、平成 29 年には 2.3 倍の約 70 万人になっている。保育施設では、健康な子どもだけでなく病気の子どもの障害のある子ども、医療ケアが必要な子どもを受け入れるため、保育者は子どもへの与薬を行うことがある。しかし保育者は、子どもへの与薬に関して様々な不安を抱えていることも明らかになっている。そこで今回は、保育者の与薬に関して、薬の理解と行動について明らかにすることを目的とし研究を行った。

【方法】 対象は、保育施設に勤務する保育者で、調査期間は、令和元年 10 月 1 日から同年 10 月 31 日。方法は無記名の自己記入式調査票を作成し、対象者に口頭及び書面で説明を行い、同意が得られた場合に回答してもらった。倫理的配慮は、研究の参加は自由意志であり途中で中止にできること、研究目的以外では使用しないこと、データは数値化し個人が特定されないことを対象者に説明を行った。

【結果】 対象者約 8 割の人が、保育施設で保護者から薬を預かった経験があると答えた。薬の内容は、内服、座薬、塗り薬、目薬、貼り薬、エビペンなど様々であった。与薬を行っている人は、看護師のみの場合と、看護師と保育者、または保育者のみ、園長と主任保育者など施設によって異なっていた。与薬の方法は、2 人でのダブルチェックを行っている施設が 8 割であったが、1 人で行っている施設もあった。また、薬の作用は理解できている保育者が多かったが、副作用を理解できている保育者は少なかった。与薬後の子どもの観察についても、行われていない状況についても明らかとなった。

【考察】 保育の多様性が求められる中、今回の調査でも、多くの保育者が薬を預かっていた。その種類も多様で、与薬に関して不安に思っている保育者も多かった。すべての施設に看護師がいる状況でないことを踏まえると、保育者の担う役割は大きいと言える。しかし、薬の作用や副作用の理解がされていない現状や、与薬後の子どもの観察については行っていない保育者も多いことから、今後保育者を対象とした与薬に関する研修会の開催などが必要ではないかと考察された。